

——『異界』。

ここではないいずこか、此岸しがんに対する彼岸ひがん、この世から見たあの世、もしくは、いくつも存在し得るといわれる並行世界。それが「発見」されたのはそう最近のことではない。昔から「神隠し」と呼ばれる現象は存在しており、それが『異界』への扉をくぐる行為だということは一部の人間の間では常識とされていた。

だが、『異界』が我々を招くことはあれど、『異界』に対してこちらからアプローチする手段は長らく謎に包まれていた。

そのアプローチを、ごく限定的ながらも可能としたのが我々のプロジェクトだ。人間の意識をこの世界に近い『異界』と接続し、その中に『潜航』する技術を手にした我々は、『異界』の探査を開始した。

もちろん『異界』では何が起るかわからない。向こう

側で理不尽な死を迎える可能性も零とは言えない。故に、接続者のサンプルとして秘密裏に選ばれたのが、刑の執行を待つ死刑囚Xであった。

彼は詳細をほとんど聞くこともなく、我々のプロジェクトへの参加を承諾した。その心理は私にはわからないが、Xは問題なく『異界』の探査をこなしている。

寝台に横たわる肉体を残して、Xの意識は『異界』に『潜航』する。Xの視覚は私の前にあるディスプレイに、聴覚は横に設置されたスピーカーに繋がっている。肉体と意識とを繋ぐ命綱を頼りにたった一人で『潜航』するXの感覚を受け取ること、私たちは『異界』を知る。

かくして、今日の『潜航』が、始まる。

——とも限らない。そういう日、おはなし。

「結構、びっくりしました」

「驚かせてごめんなさい。エンジニア、いつもあなの」

「彼とは、今まで、ほとんど、言葉を交わしたことが、なかったの……」

「普段は私としか喋らないものね、X」

「しかし、お話は、面白かったです」

「でしょう。頭は切れるし、話それ自体も上手い方だと思う。話し始めると止まらな

いことだけが玉に瑕

「なるほど」

「リーダー！ ちょっと部品買ってくるから許可ちょうだい！」

「許可は全然構わないけど、私は一緒に行かなくていい？」

「事後にリスト確認して上に渡してくれば十分。どうせ見たってわかんないでしょ」

「はい」

「じゃ、行つてきます。あ、ニュービーも借りてくわね！ ねえねえ車出して〜」

「……嵐、過ぎ去りましたね」

「毎日ずっとあの調子なの。『潜航』のときは装置の操作に専念してるから、あんまり口数多くないけど」

「なるほど」

「とはいえ、私がちょっと頼りない分、彼がしっかりしてくれてるからプロジェクトを回せるの。いつも頼りにしてる」

「もう一つ、彼について、気になっていたことが、あるのですが」

「何かしら？」

「彼が女言葉で喋ることには、理由が？」

「それね、私も知らないの。彼、初めて会った時からずっとそうなんだけど」

なんでもない日のXと私とちょっとエンジニア

2023-05-19 / ペーパーウェル 10 参加作品

シアワセモノマニア
<https://happymonomania.com/>

青波零也 Aonami Reiya
aonami@happymonomania.com
 Twitter: @aonami



無名夜行

Proof of Alice's Existence

閉じた扉と嵐のような

「今日の『潜航』は中止」

私の言葉に、刑務官に連れられて来たXは首を傾げた。

「装置の調子が悪いの。『異界』への扉を開けないみたいで、今、エンジニアが診てるところ」

Xの視線が、研究室に鎮座まします異界潜航装置に向けられる。Xを『異界』に送り込むそれは、天井にも届きそうな仰々しいサーバーラックの形をしている。実際には、その内側に詰め込まれたコンピュータが、異界潜航装置の本体だ。

そして、サーバーラックの前に座り込んだエンジニアが、コンソールを眺めながらしきりに首を捻っている。

れてつもらつたり。ただ、どちらにせよそう狙ってやれるものじゃない。前者にせよ後者にせよ、見つけることそれ自体が至難なよね」

始まってしまった。このエンジニア、とにかく話が長いのだ。特に自分野に関する話の長さは折り紙付きだ。私は彼の話に特別苦痛だと思ったことはないのだが、他の面々が不用意に話を振って後悔しているのはよく見かける。そういうことだ。

エンジニアはXから視線を外し、コンソールに流れるログを見ながら手を動かしかしはじめる。それでも、Xに向けた澁みない説明は続く。

「仮に『異界』にアプローチできる」唯一の人材として。

「どうやって、って話は割愛。どうせ誰にも理解できないし」装置の「仕組み」に関しては私すら全容を把握していない。私が技術面にやや疎いというもあるが、それ以上に装置の中心は「常人には理解しえないもの」であるがゆえ。

とはいえ、だ。「でも、仕様書くらいは作ってね。こういう時にあなたしか対処できないのは、やっぱり問題があると思うの」「善処するわ……。だって死ぬほど苦手なんでもん、人にわかるように書くの」

Xは装置と私とを交互に見ている。独房に帰っていいのか、ここに残るべきなのか迷っているようだ。『異界』では高い思考能力と決断力であらゆる事態に対応するXだが、『こちら側』では必ず指示を待つ。私が命じなければ、その場に延々と立ち尽くしているに違いない。

「今日は予定を変更して、ヒアリング中心にするわね。上に提出する報告書には、あなたの主観情報も必要になるから」

私の言葉に、Xはおずおずと頷く。何を話せばいいものやら、といったところか。Xは表情こそ硬いが、仕草や醸し出す雰囲気はやけに雄弁だ。

きたとしても、問題は枚挙にいとまがないんだけど、その中でも最大の問題が、行けても帰ってこられるとは限らないってこと。昔から『神隠し』って言葉があるくらいだし、Xも『通りゃんせ』の歌詞くらいはご存じでしょ？ 行きはよいよい、帰りはこわい。これも、神域——つまり『こちら側』とは異なる世界へ向かう際の心構え、つてわけ。まー、要するに昔から『異界』って『こちら側』から見るとそういう場所なの」

Xが目を白黒させている。真面目なXだから、「聞いているふりでやり過ぎ」という選択肢は取れないに違いない。

「帰ってこない気ならそれでも」

エンジニアはコンソールを見つめたまま頭を掻く。何しろ上から散々「属人化」だの「エンジニアに何かあったらどうする」だの言われているし、何も言い換えせないのだ。今や他の誰よりも替えが利かない人材、それがこのエンジニアである。

「とにかく、この潜航装置には主に三つの機能がある。一つ目は、『こちら側』に隣接する『異界』を探す機能で、二つ目が見つけた『異界』に一時的な扉を作る機能で、三つ目はあんたもおなじみ、意識と肉体とを切り離して『異界』に送り込む機能で、今日は二つ目の機能が

「座って楽にしてくれていいわ。発言も許可するけど、先に聞いておきたいことはある？」

定位置の『潜航』用の寝台に腰かけたXは、私がメモ用のボードを手に椅子を引き寄せて座ったところでぼつりと言う。

「ひとつ、質問が」

「何でもどうぞ？」

「まず、異界潜航装置、つて、どういう仕組みなのですか」

何でもとは言ったが、Xの言葉にはつい「あつ」と声が出た。

案の定、と言うべきか。「ちよつと、今何て言った？」

唸り声をあげていたエンジニアが、ぐるりとXを見る。びくつ、と身を震わせるXに構わ

いいけど、アタシらの仕事は『異界』を観測するだけじゃなくて、観測した結果を次に活かさなきゃならない。トライアンドエラーをしたいの一回こっきりのトライしか許されないのつて、ナンセンスでしょ？」

ただ、エンジニアの説明はわかりやすい方だとは思う。昔からの異界研究者ではないため、一般のそれに近い目線である、というのも要因かもしれない。私や他のメンバーだと、どうしても専門的な用語や概念を織り交ぜてしまいがちだから。

そもそも当異界潜航プロジェクトは少数精鋭で、主要メンバーは私を含めて六人。これは望んで少数精鋭にしているの

調子が悪くて難儀してるわけなんだけど、実際に『扉を作る』ために必要なのは、まず『異界』の座標。『異界』つてのは通常

我々には認識できない次元を彷徨つて、これを一つ目の機能で特定するわけ。んで、『こちら側』から『異界』に向けてアンカーを打つことで互いの道筋を作つてから、無理やり扉をこじ開けるんだけど——」

カタカタと手元のキーボードを叩いていたエンジニアが、びたりと動きを止める。そして、コンソールから顔を上げる。「わかった！ ちよつと手え貸して、一旦装置バラすから！」

ず、エンジニアは耳にうるさい声でまくしたてる。

「Xには何も話してなかったっけ？ あー、いや、当初はアタシもバタバタしてたから何だかんだ話す機会なかったかも。『潜航』できなくて暇してるつてんなら、今のうちに一通り教えとくから耳の穴かっぽじってよく聞いとくことね」

「あの、」

「まず、『異界』へのアプローチ方法には古くからいくつか存在していた。例えば既に『こちら側』のどこかに開いている『異界』への扉をくぐったり、『異界』から『こちら側』に来た連中と接触して向こう側に連

はなく、我々より上の世代がとごとく「いなくなつてしまつた」からなのだが。

とはいえ、今ここに集っているのが、最良目抜きに精鋭なのは間違いない。

中でもエンジニアは精鋭中の精鋭だ。元々は在野のシステムエンジニアで、研究者としての経歴はメンバーの中でも断然浅い。それこそ新人よりも『異界』の研究に費やしている期間は短いのだが、その経歴とは全く無関係に、当プロジェクトになく

てはならない存在だ。「つてなわけで、アタシが、問題を解消するために、異界潜航装置を作りました」

——そう、異界潜航装置を「作

「じゃあ、私が……」

「リーダーはそこにて。じつとして。動くな。いいわね？」

「はい」

腰を浮かせかけたところで制される。エンジニアは私にはやけに厳しいが、過去にやらした実績があるので反論もできない。そこにいた新人を捕まえたエンジニアは、即座に装置の解体にかかる。もはやXに話していた最中であつたことも、すっかり意識の外。

その様子をぼんやりと見ていたXは、ぼつりと言う。「嵐のような、人ですわね……」「そうかも」